

平和の礎

軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦 IX



平和の礎

軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦
IX

平和の礎

軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦 IX

平成十一年三月三十日 印刷

平成十一年三月三十日 発行

編集 東京都文京区大塚五丁目三番十三号
発行 平和祈念事業特別基金
印刷 新灯印刷株式会社

まえがき

平和祈念事業特別基金は、今次大戦における尊い戦争犠牲を銘記し、かつ、永遠の平和を祈念するため、関係者の労苦について国民の理解を深めること等により、関係者に対し慰藉の念を示す事業を行うことを目的として「平和祈念事業特別基金等に関する法律」に基づいて設立されました。

当基金では、その業務の一環として、関係者の労苦に関する調査研究を実施しており、この「平和の礎——軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦——」はその成果を取りまとめたものです。

この業務の実施に当たり、当基金は、平成元年度から社団法人元軍人軍属短期在職者協力協会に、主として次の三つの観点から従軍体験者の手記の執筆あるいは聞き取り等により、労苦の実態を明らかにすることをねらいとして調査研究を委託してきました。

- (一) 兵役と家族状況
- (二) 軍務・戦闘と意識
- (三) 復員後の生活と家族

同協会では、全国的に活発な調査研究活動を展開し、関係者から数多くの体験記等を収集し整理の上、「恩給資格者に係る労苦に関する調査研究報告書」として基金に報告がなされました。

報告された労苦記録の各篇には、各地で軍務に服し、過酷な戦闘体験をはじめとして、特に短期の軍務服役であるための様々な労苦の実態が、簡潔であるが往時を想起させるに十分な迫真の筆致で生々しく描かれています。

本書は、体験者にして初めて明らかにされる具体的な労苦の記録であり、戦争の残酷さ、残酷さ、悲惨さ、その上いかに無意味なものであるか、翻って、平和がいかに尊いものであり、大切なものであるかを改めて教えてくれるものです。戦後五十余年が経過し、戦後生まれが人口の三分の二を占め、戦争に関する意識の風化が進んでいるといわれる今日、軍人軍属短期在職者の労苦を徒勞に終わらせないためにも、この労苦を子々孫々に語り継いでいくことが必要であり、そのためにも、この書は貴重なものと考えます。

最後に、調査研究に当たられた同協会関係者のご努力と多くの方々のご協力に感謝するとともに、本書が平和祈念の書としてたくさんの人に読まれ、平和の一助となることを願うものです。

平成十一年三月

平和祈念事業特別基金

理事長 永山喜緑

軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦

IX

目次

まえがき

永山喜緑

〔大陸〕（満州）

戦争末期の満州と戦後の苦勞

宮本 芳男
61

第一部 勞苦体験記

無情の世界 シベリア抑留手記

片桐 勲
69

〔南方〕（フィリピン）

旭兵团を想う私の戦後

辻原 猪一郎
1

仏印進駐前の南支軍

比島・ネグロス島 私の戦争体験記

前川 保
9

賓陽・広九作戦

岩屋 明治
80

南方転進 戦塵の回顧録より

矢島 博
14

南支那宥兵潮州城奪回

丸山 菊夫
90

私の大陸戦記 湘桂反転作戦

宮嶋 政久
100

〔南方〕（仏印）

第五師団の仏印進駐

井上 光雄
22

〔海軍〕

明号作戦 現役時代を回顧する

山下 芳雄
32

ラバウル駐屯 海軍第八通信隊

田中 秀一
117

海戦に生き抜いた 看護、衛生勤務

森田 久吉
125

〔南方〕（その他）

「国民皆兵」の時代に参加して

保木松右衛門
39

佐世保第五特別陸戦隊

岡田 浩揮
133

ジャングルの彷徨

矢野 美三雄
43

南の国の抑留 恋飯島

森 由治
50

〔航空〕

思い出 ―悲劇を繰り返す―

河合 登
147

自分の遺骨を抱かされて

福眞 吉次
155

第二部 聞き取り調査記録

〔南方〕（フィリピン）

数奇の運命 戦車第二師団の生き残り 和気 清明 161

バタアン、コレヒドール攻略

野戦重砲の砲手 安達 義夫 169

比島ネグロス島の死闘

地獄谷からマンガラガンを越えて 齋藤藤左衛門 178

〔南方〕（仏印）

我が人生の骨格となった戦車隊

歩兵第八十二連隊（討部隊）

仏印ランソン要塞攻撃 伊東 八郎 195

〔南方〕（その他）

西部ニューギニア・

ハルマヘラ島の建築中隊

ルソン、仏印無線通信隊

峰松 嘉哉 205
橋川 篤美 211

〔大陸〕（満州）

戦車隊幹部候補生

ソ満国境、シベリア抑留で得た

一人は万人のため

万人は一人のため

張鼓峯参戦以来通信隊一筋の軍務

〔大陸〕（北支）

鉛筆を倒して生き延びた軍隊

第四十一師団輜重兵連隊

私の北支那戦記

一日千秋・待っていた「赤紙」

運命に従い

内地―蒙古間二回の戦務

〔大陸〕（中支）

北支から中支へ転戦

広水の教育隊から応山の警備隊へ

軍隊日誌 武漢攻略戦前後

伊藤 鐘信 219

安井 俊夫 227
小松 武雄 232

宮舛 義雄 239

榎坂 雪三 245
大塚 清雄 252

大沼 祐三郎 258

山田 廣 263
朝倉 博 271
岩田 義雄 276

遙かなり中国戦線

長坂 義行 288

私の戦争体験と銃後の家族

森本 克己 294

中国戦線参戦記録

上代 芳房 308

中支山砲兵隊 戦後蒋介石軍の馬教育

井上 道太郎 321

〔大陸〕(南 支)

農民か兵隊かわからない中国軍

宮崎 佐十 327

「陸軍三等兵」として南方で

現役軍人として南支防衛

浅江 喜佐雄 332

〔海 軍〕

海軍水測兵の戦争体験記

衣川 富雄 341

親の反対を押し切り海軍志願

江目 育蔵 347

自分の海軍歴 駆逐艦「涼月」

牧 尊 352

対空・対潜・船舶警戒隊

小関 正勝 359

志願海軍兵、終わりまで幸運だった

山中 宗次 364

海軍航空機整備

空母「瑞鶴」より奇跡の生還

檀元 正三 368

不沈駆逐艦「楨」と私の人生航路

松井 喜一 373

〔航空〕

「同期の桜」に思う

―海軍甲種飛行予科練習生―

多田 耕三 378

生死一如 ―特別攻撃隊戦記(一)―

長沼 武治 384

満州飛行場大隊勤務とソ連抑留

笹沼 収作 397

〔その他〕

満州・宮古島・沖縄(PW)

斉藤 敏男 403

いわれなき終戦後の体験

椎原 芳郎 409

作戦軍の補給動脈

湘桂作戦中の輜重隊

小泉 悦郎 421

あとがき

南方（フィリピン）

旭兵団を想う私の戦後

秋田県 辻原 猪一郎

私は大正十二年七月八日、秋田県大曲町の中心を流れる丸子河畔で生まれました。私の軍隊の体験は『平和の礎』第六巻に、「旭兵団満州国境よりルソン島の死闘」を書きましたが、今回は後方（衛生隊）より顧みたまわらない旭兵団について、戦後五十余年の今日、私の復員後と共に書いてみたいと思います。

旭兵団（第二十三師団）は昭和十四年のノモンハン事件で難戦苦闘しました。その後兵団の再建にとりか

かり、兵員、装備、訓練の充実強化につとめました。熊本（歩兵第六十四連隊）、鹿児島（歩兵第七十一連隊）、都城（歩兵第七十二連隊）の九州健児による強兵編成の在満（ハイラル）部隊であり、対ソ戦略部隊として鍛えられた精鋭兵団でありました。

しかし昭和十九年十二月の臨時編成時に、野砲兵第十七連隊は機械化砲兵の兵備が輓馬砲兵隊に格下げされ、機能なくなり、兵団としては不満でありました。こうした優良兵団も渡比に際しては一部をハイラルに残置したり、海没したりして、兵団全体として約半数近い損害を被ったのでした。実際的には戦時編成の一個師団として具備しているものではありませんでした。

旭兵団も、満州で動員発令（昭和十九年十二月十九日付）が遅れ、実に敵進攻の三週間前に当たり、作戦

的にはかろうじて間に合う状況であったとされています。そして約一カ月の期間内に雪の北滿からきた將兵にとっては冷房室から極暑の露天に出されたような氣候の温度差に苦しみ、参りました。

そして米軍がリングエン灣岸地区に上陸するわずか前の昭和十九年十二月二十日〜三十日ごろに主力部隊は同地を確保し、敵の破砕につとめるための配備にしていたのであります。一方、残りの後方部隊や海没生き残り部隊は昭和二十年一月から、私の衛生隊は一月七日ごろに灣岸地区のシーソンに配備にいたばかりでした。いかに切迫した状況下とは言え、二日から二十日ぐらいの期日で充分な陣地構築、その他の戦備配置をすることなく、戦場に投げ出されては、十分に戦力を發揮することはできませんでした。旭兵団は敵米軍のリングエン灣岸に上陸以来、いつも矢面に立って、ルソン作戦の中軸兵団として、一番大事な任務を受けて、激戦に激闘を続けました。

また、海没により兵器、彈藥、糧秣を失い、その補充もできないままに、戦闘に突入してしまいましたの

で、ことに食糧の欠乏には困ったものです。火砲も持たず、食糧も欠乏してマッチ箱一つ程度の支給米で過ごしてきた兵団でありました。

兵士は衰弱しており、その多くは傷病し、それを苦にしたり、戦況不利なるわが軍の前途を悲觀したり、気の弱い者の中には自殺する者が出るなど、早まった行動だけに残念でなりませんでした。

石にかじりついても生き抜こうとする気丈な精神力と、食糧不足を克服するのには何でも食べてやろうとする意欲（食欲）の持ち主でないと生きていけないと思いました。いずれにしても將兵の苦難は言語に絶するものでありました。

米軍がリングエン灣岸を埋めつくした水陸両用車は約十四輛、上陸用舟艇は約二十四輛を越えた敵兵力に對して、わが水、陸、空にわたる特攻攻撃が敢行されるも大勢を制することができず、緒戦で勝敗が決したような戦況でした。それは何分にも膨大な物量を誇り、科学兵器を持つ敵米軍をいかに必死に攻撃しても戦線の保持は困難であったようです。

各部隊の將兵が日本の最後の勝利を祈念しつつ、数倍の兵力、数十倍の火器、火力、完全制空權を握られた空軍を相手に戦い抜いた強い精神力とそれに応えた尊い犠牲者に対し、今一度回想してみる必要があると考えます。

まず北部ルソンは山岳地帯で、北流する比島第一のカガン河の河谷地帯は米の産地であることを踏んでの作戦準備をしました。この周辺のプログ山地が最終抵抗陣地となりましたが、ここで食糧の自給自足ができると思い込んで作戦を立てたのが間違いで失敗でした。もともとルソン島は食糧の自給自足のできないところのようでした。ここでも調査ミスによる作戦の失敗がありました。

撤退につぐ撤退でプログ山の周辺では密林（ジャングル）が多くなって各部隊間の連絡が途絶えてしまい、その後終戦まで、お互いの消息が不明でありました。そして食糧もますます窮乏し、患者は続発し、將兵の苦難はとも言葉では表しようがありませんでした。

やがて、ぼつぼつ逃亡する兵士が始めました。それらの兵達が密林や谷間にかくれているうちにアメーバ赤痢やマラリア、そして飢えのため死んだ姿を何度か転進（撤退）の途中見ました。

戦友の足手まといになると苦慮し、自分の銃で自殺した負傷兵もいましたし、負傷しても手当てもされず、元気な者も食糧がなくてつぎつぎと倒れ、いったん倒れたら立ち上がれず、死を待つばかりの者もありました。また白衣の天使も骸骨の姿になり、祖国のためとは言え、あまりにも哀れな最期でありました。

リンガエン湾岸の戦闘では、当初の米軍兵士の配備は、第一線部隊には黒人兵と一部比島兵の混成部隊を、そして後方（第二線）に米国人兵（正規軍）を配備していることもありました。

後方部隊である衛生隊から観る第一線（前線）の戦況等は、間接的観測として担架兵の前線での負傷者収容時の状況などから、また撤退して来た負傷兵等から聴取して戦況の概略を知りました。

そして米機動部隊が活動不可能なため、山岳地帯に

は米正規軍はほとんど進出しませんでした。

そこでは地勢、土地事情に明るい比島ゲリラ兵、黒人兵が活動し、ことに比島ゲリラの温床地帯である山岳州（マウンテン州）では、正規軍以上に秀れたところがあり、活躍して、わが兵団將兵は、常にこれらのゲリラに妨害されたり、脅かされながら、また兵団の側面及び時として後方から攻撃を受け、一方では前面の米軍正規軍と戦闘せざるを得ず、將兵のその苦勞は想像以上のものであった、と聞いております。

そこで任務の關係上、どうしても兵力を分散、配置するので、部隊が別れ別れになるという状態で戦闘する場合が多かったようです。前面の敵のみという今までの戦闘の常識を覆す特筆すべきことであつたのです。わが軍は敵米軍のみならず、各地の抗日ゲリラに苦しめられました。徹底抗戦を選んだ日本軍はルソン島の山岳地方をはじめ各地の山中に閉じこもりましたが、武器は勿論のこと、食糧その他の物資欠乏で悩みました。それだけ現地徴発をしたために、地元住民に対する暴挙な仕打ちが多かつたと思います。

大変に氣の毒に感じているのは、日本軍に従つて協力して戦い、山中に逃れた在留邦人や現地住民にも多くの犠牲者が出たことです。

なお、終戦後も部隊から離散した日本兵士の中には、山中に隠れて、すぐには米軍に投降しなかつたものも少なくない模様でした。

別れ別れの部隊間の連絡は、通信隊が地形または敵の妨害のため、なかなか連絡がとれなかつたり、部隊兵士が行方不明になるなど、転進先不明のまま行動するので、間違つて米軍陣地内に入り込むこともままつたと聞いております。

そのうえ兵器はなく装備が悪く、とくに土木作業用の器具機材がなかつたので、壕を掘る場合とか、河に橋を架ける木材を切り倒すのに、現地比島住民の使つてゐる鋤刀のようなものを使用して、準備、調達するよりほかにしうがなかつたようであります。とくに山岳地帯では、あらゆる場面と遭遇し困難を極めたやうであります。また食糧不足はこの部隊も同じことであつたので、現地調達するのは、ことに山岳地帯で

は無理であったと思います。

そのうえ、全軍に指示された赤痢予防対策としての生水飲料の禁止。マラリア予防対策などの医薬品の備蓄保存もなく、負傷者及び疾病患者を救援できず、戦死者より病死者の割合が多い、悲しい事実が証明されました。だがよくもこれらの艱難辛苦に耐えて、終戦まで戦い抜いたと感無量なものがあります。しかし部隊によっては八〇パーセント以上の尊い人命を失ったことを忘れてはいけないと思います。

よくぞ生き残れた私は、約二年二カ月の収容所生活を米軍病院入院で余儀なくされ、昭和二十二年十月、本土（大村湾）に復員しました。

故郷への帰途、東京までの各駅停車の普通列車には、いっぱいの人々がリュックサックやら非常袋、買い出し袋を持ち、車中は立錐の余地もないほどでした。

九州の主要な都市八幡、戸畑、小倉など各地の破壊された様子にはビックリし、一面の焼け野原と化した様に、改めて敗戦の憂き目を感じました。

中国地方、関西、中京（名古屋）、東京とどこも甚大な空爆の被害を受けており、目を覆うものでありました。東京駅から電車で上野駅下車、復員兵は隊列を組んで上野公園内寛永寺に一泊宿泊し、翌日各地区ごとに分散し帰郷しました。

私は奥羽線にて故郷へ。大曲駅には爆撃された跡もなく、故郷の良さと有難さを感じました。奥羽線の途中の各地では空爆された跡もなく、相変わらずの農村風景を目の当たりにし、日本の良さを噛みめました。

郷里大曲駅に到着した時刻は午後三時ごろだったと記憶しております。大曲駅より伯母の家に立ち寄りしました。実は比島収容所で何回も夢枕に立たれ、元気で早く帰るんだよ、健康には十分に気をつけるのだよと言われたのが気にかかっており、立ち寄ったら他界しており、仏前にて拝み、帰宅の報告をして自宅に帰りました。両親、弟妹家族一同元気でおり、帰宅を喜んで迎えてくれました。

私が現役入隊した昭和十九年三月ごろも、戦争協力

のため物資不足の折にて、物資統制令による諸物資の配給制で諸物資の自由販売品はなく、帰宅当時、私宅の生業（家業）の呉服・衣料販売及び染工業も自由販売物品はなく、店内では家具、飯台、テーブル等を県内木工業者のご厚意にて販売致しておりました。

衣料品、染物に関する物資も父が各種統制組合の陣頭に立ち、各業者への物資の円滑なる配給に尽力していた関係で、染物工場の染料の藍やその他の資材も少ないながら支給され、細々ながら仕事をしておりました。

食生活は米産地とはいえ配給制でありましたが、当地区はお得意様の大半である農家の方々の援助により、頂いた米や野菜などで不足がちなながらもまああの生活にて暮らしておりました。

長男である私は戦中の余病（マラリア、肋骨打撲傷）並びに栄養失調にて体力が衰えているので、両親は自分の間は休養をとるよう配慮してくれましたが、営業物資の不足な当時、遊んではおられないので、一生懸命に家業に精を出して父に協力し、働きました。父は

相変わらず自店の家業や仕事は母に任せ、町の仕事、公務（町会議員）に寧日のない有様でしたので、私は家業に努力しない訳にはいきません、体力にあわせながら頑張りました。

父は私の入隊後、当時の軍需省の要請により、木造船用の船釘や船用鉄工品の工場を作り、また同じく軍需用のタオル製品工場も建設し、大勢の人々を使用しておりました。父は当地の行政機関その他の要請あれば、当町民等の人々と共にいろいろな仕事をしており、他人（公人）のため仕事を何でも引き受けてやっておりました。反面家業の方は母任せでしたので、私は手伝いというよりも中心になって働かないとどうにもなりませんでした。

諸物資の少ない戦後時代は、戦中の留守時代の家業を取り戻すべく頑張るより他ありませんでした。

私の生業は物資不足による問題と、戦後の諸問題、農地改革、金融紙幣の交換改革、その他により一時資金的に困ることがありましたが、家族全員及び使用人等の一同の協力により、どうにか乗り切ってここまで

やってこられました。

日米決戦の天王山といわれた比島決戦も、もうすぐ二十一世紀となる今日、遠い遠い昔の出来事になりつつあります。しかし、七十余歳を迎える老兵は、今こそ我々が戦争体験した事実を書き記さなければ……と思うのであります。

あの南国の酷暑に耐え、飢餓と過労と孤独と恐怖のなかに辛勞し、悩み、苦しみと戦いました。戦争の悲惨さと空しさは、戦場で体験した者ほど痛切に感じると思います。

終戦の報せを聞いた時には、比島北部ルソンの山岳奥地戦線で、余命幾許もなく、祖国へ無事に生還できるだろうか……到底生きて帰れぬと思い、日夜北の空を眺めては祈り、考えておりました。

その後無事祖国に還り、戦後しばらくは戦争を語ることはばかられました。自分だけが生きて還ったことが亡き戦友に申し訳なく、自責の念に駆られていたからであります。

また何故あのときの、あの瞬間に、もっと強く手を

差し延べて助け合わなかったかと、戦中のシーンを思い浮かべながら、心の中で手を合わせて冥福を祈っております。

そのころは、戦況は厳しく、一刻を争う命令伝達という任務に忠実であつたばかりに、時間を浪費してはと思い、命令伝達は何よりも優先されるという使命と、個人の生命、救命（救助）との間で、悩み苦しんだこともありました。

私は旭兵团（第二十三師団）衛生隊（第一一八八部隊）のハイラルでの創設から終末まで在籍した一員として、この間の戦争の体験と見聞した事柄をまとめ、「北部ルソンの戦場」で共に戦い、不幸にして戦没した戦友の御霊（英霊）に捧げる一念で書き記しました。もうあれからはや五十余年の長い歳月が流れ、この間にも多くの僚友たちと幽明境を異にしました。時は流れ、逝く人、病む人、私も老境に至っております。このときこそ、苦難に耐えた貴重な体験を、また、その時に、どのように行動したかを詳述して記さなければならぬと思います。

資料の大半を戦中に比島軍抗日ゲリラの襲撃を受け
た際に紛失した経緯もあり、正確さに欠ける点がある
と思われませんが、無事に米軍の没収を避けて持ち帰っ
た資料の一部をもとにできるだけの整合に努めました。
当時の私共には、戦況は勿論のこと、いかなる作戦
によるものの行動か、完全に知る由もありませんが、
命令伝達者として、おぼろげながら、戦況の概略を判
断することができました。

わが衛生隊は創設在隊者数七三四人中、五八四人の
尊い戦友を失いました。後方援護部隊とはいえ、この
ような結末になろうとは夢にも思っておりませんでし
た。

これは比島北部ルソン戦線の激戦を物語るものであ
ると思います。このことを後世の人々に知っていただ
き、戦争は厳しく、烈しくそして惨酷で、空しさ、
平和の尊さを伝えることが生還者の務めだと思ってお
ります。

そして戦争による悲劇を再び繰り返さないためにも、
また日本再興の礎として、散華した多くの同士（戦友）

の御霊を弔い、お慰め申しあげるとともに、わが国の
永遠なる平和への悲願をこめて、その繁栄を祈るもの
であります。

【解説】

体験記執筆者の辻原猪一郎氏の所属した第二十三師
団（旭）は、昭和十四年、ノモンハン事件に於ける主
力部隊として勇戦するも、兵力、装備の優勢なソ連軍
に対し衆寡敵せず、多数の犠牲を出した悲劇の師団と
して知られているが、昭和十六年七月十六日、臨時動
員時の師団長は及川源七中将であった。また辻原氏の
所属した師団衛生隊長は志波常一中佐である。

北満・海拉爾^{ハルビン}において第六軍隷下、北の守りの重点
地域において常に訓練に精励していたのであるが、昭
和十九年、比島戦線に急遽派遣、第十四方面軍隷下と
なる。当時満州からは、第十師団（鉄）、第十九師団
（杉）等と共にルソンに上陸したが、途中一部は海没
し、兵員、兵器、弾薬、糧秣、衛生材料等の多くを失
い、米軍上陸（レイテは既に米軍の手中にあり）、ル